

ランチタイムミーティング参加記

登壇者：中森弘樹先生

2024年6月14日、昼休み。文学部人文研究センターにて、中森弘樹先生のお仕事をめぐってランチタイムミーティングが開かれた。中森先生は、文学部史学科および社会デザイン研究科(旧21世紀社会デザイン研究科)で准教授を務める、社会学を専門とする研究者だ。現代社会における「失踪」を中心に、家族などの親密圏に関連する諸問題を幅広く研究している。主著に『失踪の社会学：親密性と責任をめぐる試論』（慶應義塾大学出版会、2017年）、『「死にたい」とつぶやく：座間9人殺害事件と親密圏の社会学』（慶應義塾大学出版会、2022年）などがある。

今回の回では中森先生には、ご自身の失踪研究の一例として、「戦後の日本の“失踪”に関する言説の一端」について紹介していただいた。

中森先生によれば、1950年代～1980年代の「失踪」に対する社会の関心の変化は、当時の社会の変化を強く反映しているという。例えば、50年代に話題となった「家出娘」と、70年代に流行した「蒸発妻」の二つの「失踪」を比較すると、農村の貧しく閉塞的な生活からの自由が語られた「家出娘」に対し、「蒸発妻」では不満のある夫婦関係からの自由が語られているように、それぞれの目的は大きく異なっていることが分かる。

このように、「失踪」という現象が社会にどう扱われてきたかを捉えることで、他の様々な現象に繋げながら社会を考究するというのが、中森先生の研究だ。以前と比べてはるかに多くの社会的/空間的な自由を手に入れた我々は、しかし依然として、「失踪」に強い違和感を覚えてしまう。その違和感から社会について考える事こそが、中森先生の研究全体を貫く問なのだという。

研究内容についてお話いただいた後は、質疑応答の時間が設けられた。多様な角度からなされた質問とそれに対する回答の中から、いくつかかいつまんで紹介したい。

Q1.「アメリカ文学では、自由や孤独を求めた失踪が描かれることが多い。そうした共同体と個人の関係は、今日お話しされた日本の社会学と、何か関係してるか」

A1.「日本と英米圏の信仰的な違いが大きく関わっていると思う。一神教を背景にした世界では、“失踪”は自己の中にある神との戦いでなければならないが、日本の場合は、別の場所に行けば別の神がいる。そこに主題を置くと、安部公房などの世界観に繋がると思う」

Q2.「“蒸発妻”が流行した時期が、ちょうど専業主婦率が高くなっている時期と一致する。どのような関係があるか」

A2.「家族社会学において、70年代半ばは転換期。ピークに達した専業主婦率が下がり始めたり、少子化のトレンドが生まれたり、様々な変化が起こった。その過渡期を象徴するものとして“蒸発妻”が流行したと考えると、面白い」

大変恐縮ながら、この会に参加するまで、私は中森先生のことを存じ上げていなかった。しかし中森先生の研究内容は、私が関心を持って取り組んでいる「ケア」という領域と重なる部分が多く、後日拝読させていただいた著作は、どれも私の「ケア」の展望を大きく広げてくださるものであった。このような素晴らしい機会を設けてくださった主催の先生方、そして中森先生に、大きな感謝の意を表したい。

北條 颯汰(文学部文芸・思想専修4年)